

●世界史Q&A●

Question

イギリス革命の時期と内容について
教えてください

Answer

【回答者】岩井 淳

日本の世界史教科書では、「イギリス革命」を「ピューリタン革命」とする記述が一般的です。以前は、一七世紀半ばのピューリタン革命と後半の名誉革命をあわせて「イギリス革命」とする記述も見られましたが、現行の教科書のほとんどは、イギリス革命の開始にふれた後で、山川出版社の『詳説世界史』のように「この革命は、ピューリタンが大きな役割をはたしたことから、ピューリタン革命とも呼ばれる」（二二四頁）と説明しています。

しかし、そこから一歩踏み出し、この革命の時期と内容を調べてみると、高校の各教科書には顕著な差異が存在することがわかります。端的にいえば、イギリス革命Ⅱピューリタン革命

が、一六四〇年に始まって六〇年に終結したとする山川出版社の各教科書と、四二年に始まって四九年に終結したとするそれ以外の各教科書には、大きなギャップがあります。そのため、入試問題でイギリス革命の時期を問うことがタブーになるほど、由々しき事態が発生しています。頼るべき教科書記述が、真つ二つに分裂しているのです。どうして、このような事態が生じたのでしょうか。以下では、ピューリタン革命の時期に関するギャップが何に由来し、この背景に、どのような研究上の問題があるかを考えます。末尾では、その亀裂を修復する方法について言及します。

「イギリス革命」という用語は「イギリス」と「革命」という二つのことばからなっています。最初に「イギリス」から始めましょう。良く知られるように、「イギリス」は「イングランド」と「ブリテン」（もしくは連合王国）という二つの意味をもつ曖昧な言葉です。「イギリス革命」は「the English Revolution」の訳語ですから、より正確には「イングランド革命」と訳すべきでしょう。実際に、最近の世界史教科書では、山川出版社の『新世界史』のように、「イギリス革命」ではなく「イングランドの革命」と表記するものが現れています。そこで以下では、一七世紀半ばの出来事を示すのに、どの教科書でも使われる「ピューリタン革命」を用いることにしましょう。

次に「革命」です。教科書記述に見られる差異の背景には、一七世紀半ばの出来事を「革命」と見るか、「内戦」と見るかという大きな問題が控えています。ピューリタン革命を一六四二年に始まり四九年に終結したとする教科書の一つが帝国書院の『新詳世界史B』ですが、そこには「ピューリタン革命とよばれる内戦が勃発した」（一五六頁）とあります。実際に内戦は四二年八月に始まるので、開始についての説明は正しいですが、第一次内戦は四六年六月に一旦終結し、第二次内戦は四八年四〜八月なので、厳密にいうと、内戦の時期は四二〜四九年ではないことがわかります。

他方で、ピューリタン革命を二六四〇〜六〇年とする見方はどうでしょうか。この見方は、国王チャールズ一世が四〇年四月に議會を招集したものの、この短期議會が解散された後、同年一月に長期議會が招集され、諸改革に取り組んだことを重視します。それは、内戦が勃発して議會派が勝利し、四九年の国王処刑、その後のクロムウェルの護国卿就任をへて六〇年の王政復古までの一連の過程を革命と捉えています。四〇年に招集された長期議會は、四八年末の長老派追放をへて、五三年に解散されますが、五九年末に復活した点も見逃せません。革命議會として機能した長期議會の存続期間は、四〇年から六〇年でした。このように、ピューリタン革命を四〇〜六〇年とする

説は、一連の流れを連続的に説明でき、四〇〜四一年に諸改革がなされ、四九年以降も改革が続いたことを考えると、それなりの説得力をもっています。

それならば、革命論で決着がついたのででしょうか。答えは否です。現実には、それほど簡単ではありません。革命論と内戦論の背後には、欧米の研究動向に根差した変遷と亀裂があることを忘れてはいけません。研究史をひも解くと、一七世紀半ばにブリテン諸島でおきた事件ほど、様々なタイムで呼ばれてきたものはないことに驚かされます。一七世紀から一八世紀までは、議會が国王を処刑台に追いつめたことから、この事件を「大反乱」と呼ぶのが通例でした。しかし、一九世紀から二〇世紀半ばになると、一転して「ピューリタン革命」や「イングラッド革命」といった革命論が有力となります。その前提には、ホイッグ史学やマルクス主義史学の影響がありました。だが、二〇世紀後半になると、再び「革命」は忌避され、「イングラッド内戦」や「三王国戦争」といった内戦論が浮上します。それを推し進めたのは修正主義と呼ばれる新潮流でした。最近では革命論が巻き返し、他方で「ブリテン内戦」論や「ブリテン革命」論も登場したりと、この事件には、実に多様なタイムが付与されています。この用語上の混乱こそが、分裂する教科書記述の根底にあるといっても過言ではありません。

しかし、混乱を乗り越える方法は皆無ではありません。その方向は、差し当たり三つほど考えられます。第一は、空間的に視野を広げ、一七世紀半ばの出来事を、イングランドのみならず、スコットランドやアイルランドも含め、三国にまたがる複合国家形成の転機と捉えることです。そこからピューリタン革命を「プリテン革命」と見る視点が開けてきます。この視点については、岩井淳『ピューリタン革命と複合国家』（世界史リブレット25、山川出版社、二〇一〇）および岩井淳編『複合国家イギリスの宗教と社会——プリテン国家の創出』（ミネルヴァ書房、二〇一二）を参照してください。

第二は、時間的な幅を広げ、ピューリタン革命を、一七世紀末の名誉革命から一八世紀のアメリカ独立革命まで見通して捉えることです。日本では、元々、ピューリタン革命と名誉革命を関連させる見方がありましたが、それをさらに一八世紀まで広げることは有効です。実際に、ジョン・ポーコックらはピューリタン革命、名誉革命、アメリカ独立革命を「三つのプリテン革命」として連続的に捉える視点を提起しています（J.G. Pocock(ed.), *Three British Revolutions: 1641, 1688, 1776*, Princeton, 1980）。

第三は、革命と内戦の関係を、水と油のように反発するとは考えず、両者の相互関係を問うことです。通常は、一六四〇年

から始まる革命において、四二年から四八年まで、アイルランドとスコットランドの征服を考慮すれば、五一年まで内戦があったと考えます。しかし、近年のマイケル・ブラディックの書物『神の怒り、イングランドの炎』（未訳）は、三七年のスコットランド暴動から「三王国の危機」が始まり、四二〜四六年までプリテン諸島で内戦が進行するものの、その先の四六〜四九年にかけて「革命」があったとします（M. J. Braddick, *God's Fury, England's Fire: A New History of the English Civil Wars*, London, 2008）。この議論は、従来とは違うかたちで、内戦論と革命論を融合して理解するものでしょう。

以上をまとめると、ピューリタン革命の時期を、一六四〇〜六〇年とする見方と、四二〜四九年とする見方のギャップが存在し、その背後には、欧米の研究動向を反映した革命論と内戦論の亀裂があることを示しました。現時点では、四〇〜六〇年の見方が説得的ですが、実際の研究状況は複雑化しています。しかし、亀裂を修復する方法がないわけではなく、前述した三つの動向などが登場し、ピューリタン革命の新たな意義を見つけてはじめています。これらの成果に照らし、教科書記述におけるギャップをうめ、少なくともピューリタン革命の時期に関しては統一した見解を記載する必要があるでしょう。

（いわい じゅん／静岡大学人文社会科学部教授）